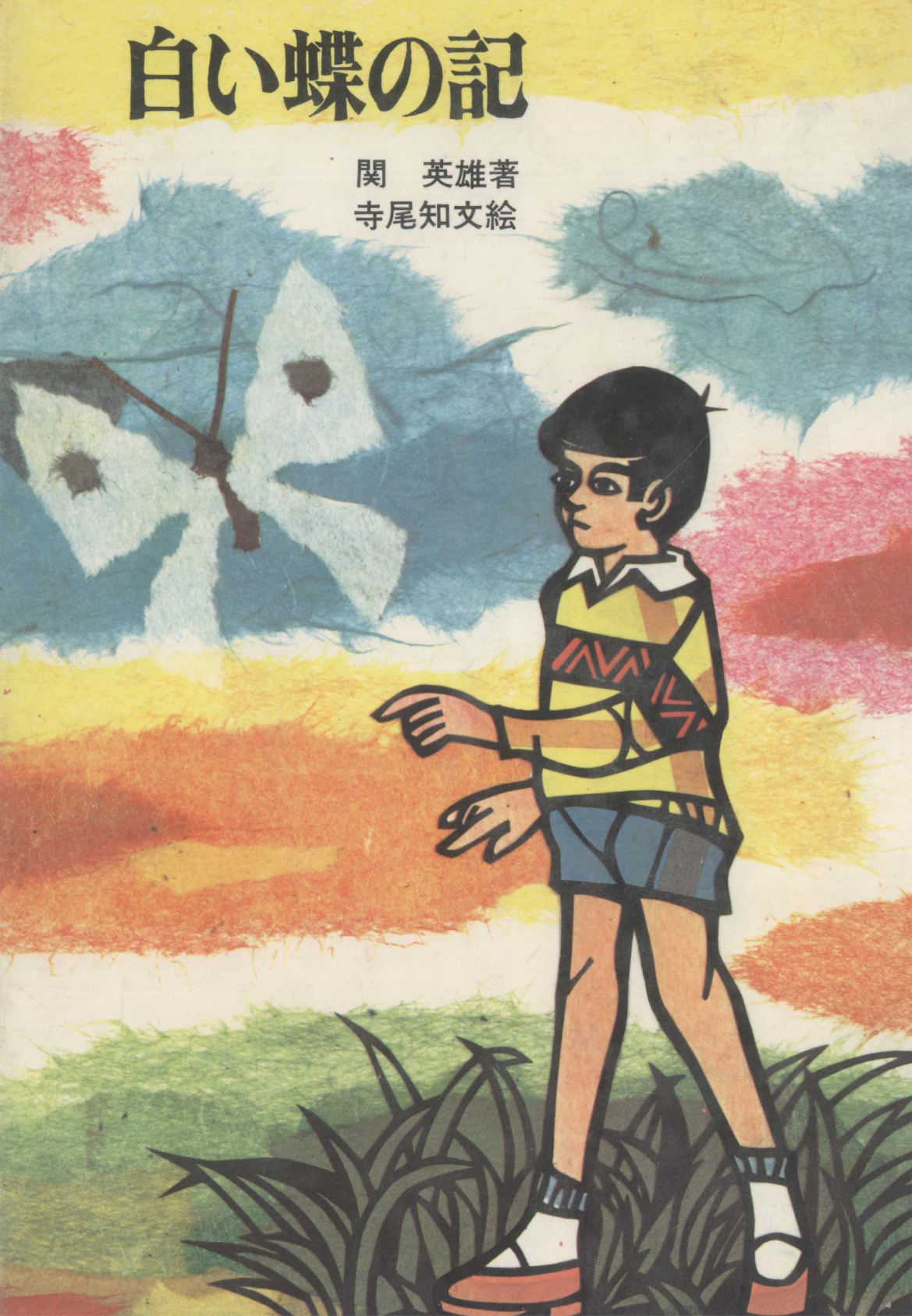
白い蝶の記

関　英雄著
寺尾知文絵



白い蝶の記

関　英雄著 寺尾知文絵

913.6 関　英雄
白い蝶の記
新日本出版社　1971
214P 21.5cm　(新日本創作少年少女文学12)

関　英雄
せき　ひで　お

1912年，名古屋に生まれる。給仕・事務員をしながら商業学校卒業。読売新聞記者，雑誌「子供の広場」の編集同人などをへて文筆活動にはいる。1942年童話集「北国の犬」を刊行。日本児童文学者協会の創立に参加，現在同会理事長。

おもな著書「きつねのチョコレート」(講談社)，評論集「新編児童文学論」(新評論社)など多数がある。「小さい心の旅」(偕成社)が第18回日本児童文学者協会賞，第2回赤い鳥文学賞，サンケイ児童出版文化賞推薦を受賞。

寺尾　知文
てら　お　とも　ふみ

1919年，兵庫県養父郡大屋町に生まれる。

家の光，光のくに，小学館，学研，旺文社等絵本・雑誌・新聞に執筆。

個展・グループ展に作品発表（日本画）現在，日本漫画家協会現肖美会会員

新日本創作少年少女文学　白い蝶の記

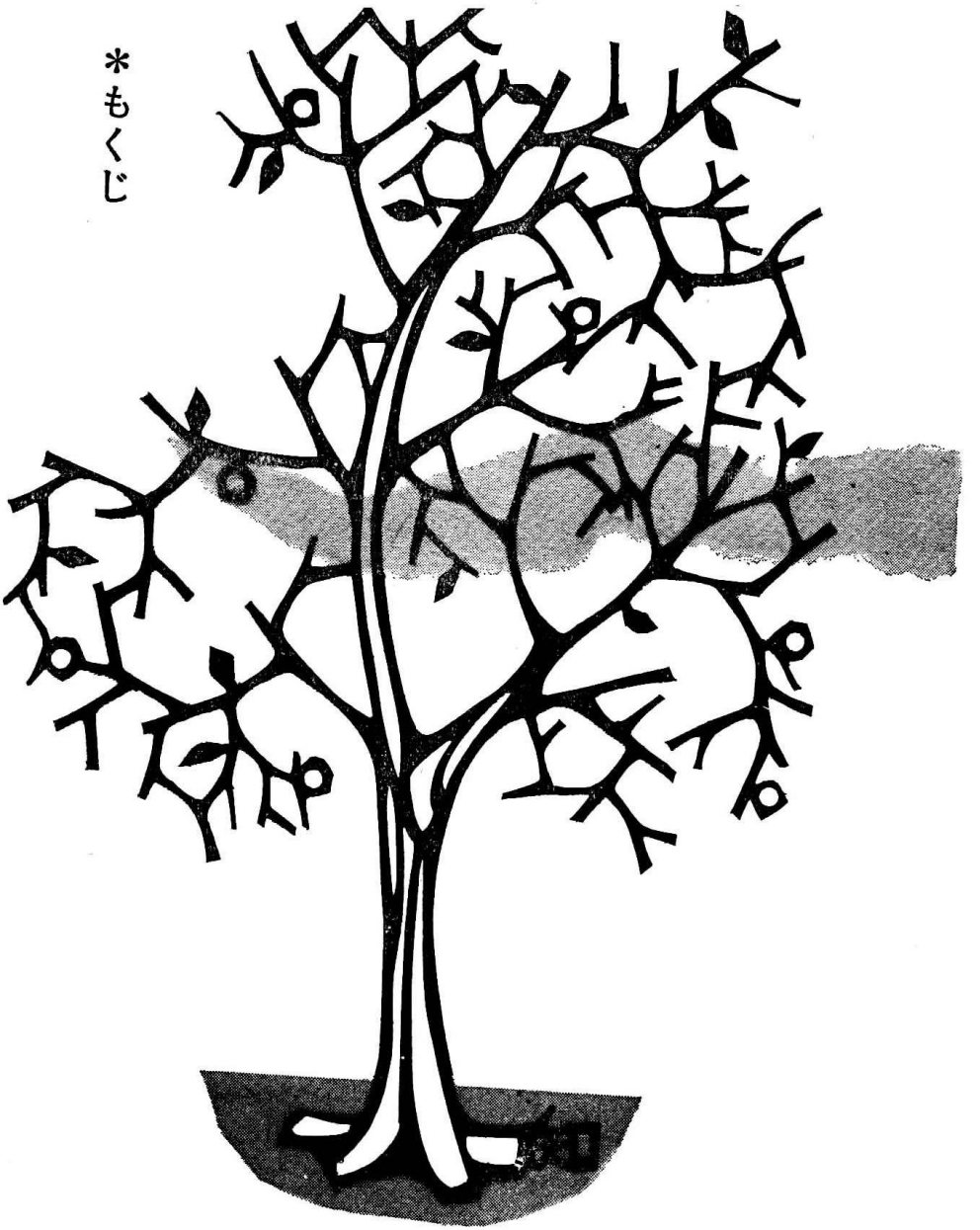
1971年 10 月 20 日　第1刷発行
1977年 4 月 15 日　第4刷

著者　関　英雄
画家　寺尾知文
発行者　松宮龍起

郵便番号 112　東京都文京区大塚3－3－1
発行所　株式会社　新日本出版社
電　話 (945) 8511　振替東京3－13681
印刷　鎌倉印刷株式会社　製本　小高製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

＊もくじ



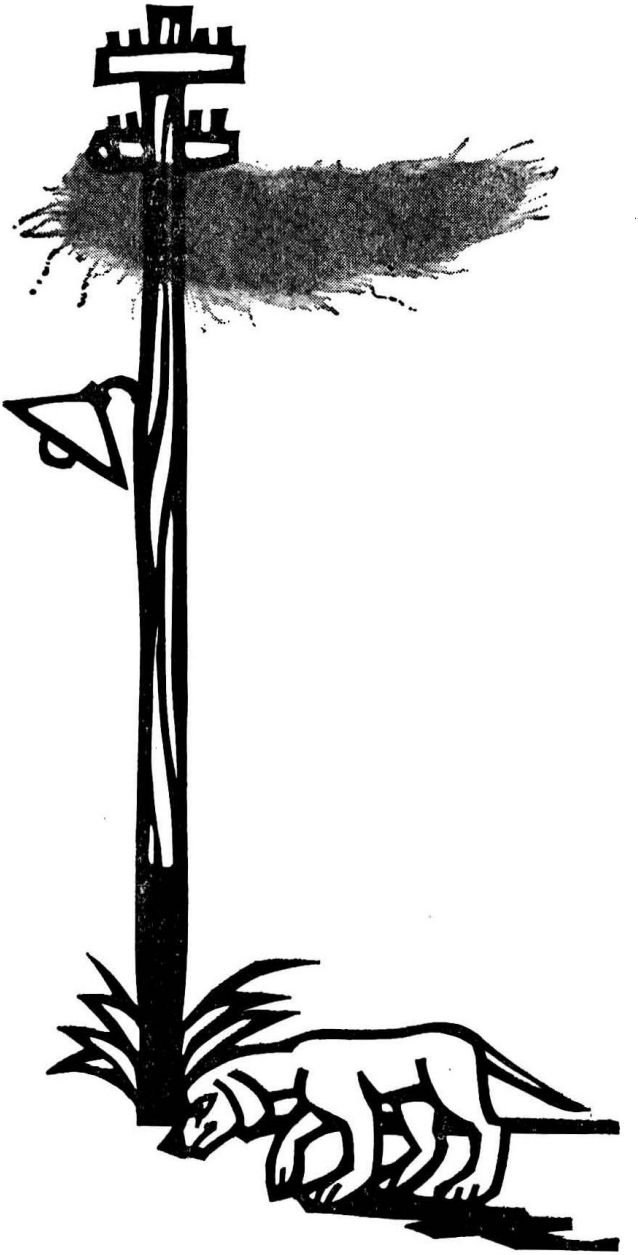
迷鳥ものがたり……5
ねむい星……55
白い蝶の記……67
赤いゴンドラ……89

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

太陽と月……125
悪童日記……151
サルカニ合戦……187
あとがき……212

装丁・さし絵

寺尾知文



■迷鳥ものがたり

一

「迷鳥」――めいちょうと読む。四人の少年があつまってつくった雑誌の名だ。その雑誌が、どうして生まれて、どうしてつぶれたかという話をする。すこしふるい話だが、いま、世の中へ出てはたらいている、または、これから世の中へ出ようとしている少年少女諸君にも、なにかのたしになる話のように思うから。

正二が復興庁出張所という役所の給仕になったのは、かぞえ年十五のときだ。復興庁というのは、大震災で焼けてこわれた東京の町を復興させるために、土木や建築のじっさいの仕事をやっている役所だった。大震災から何年かたっていたが、まだそういう役所がうごいていた。東京の下町のほこりっぽい大通りに面して、二階建てバラックのかなり大きい建物である。中には人がたくさん、はたらいていた。正二は整地課というへやの給仕だが、そのへやには課長、技師、技官、事務員、臨時事務員など、あわせて四十人ぐらいいた。ひとりのタイピストのほかは、みんな男ばかりだった。

朝のふきそうじから、お茶くみ、書類はこび、電話のとりつぎ、役人たちのお昼の弁当の注文と

知

り、謄写版ずりなど、給仕の用はきまっていたが、正二が小学校を出てすぐ給仕にはいった、ある会社とくらべて、その二ばいぐらいいそがしいのは、給仕がひとりしかいないだけでなく、ここでは人の使いかたがらんぼうなためだった。まえの会社では、「給仕くん。」とか、名をよんで「吉岡くん。」といって、きまった用だけたのむ人がおおかったのに、ここではだれもが、「給仕っ。」とどなって、「たばこを買ってこい。」とか、「えんぴつを、けずってくれ。」とか、こまかいことまでいいつける。「給仕さん。」と、やさしくいうのは、タイピストの石渡美津江さんくらいだった。ここは、工事の現場のことをあつかう役所だから、「土方みたいなあらっぽいのばかりなんだ。」と、夜間大学生で臨時事務員の久保さんが、昼めしのジャムパンをほおばりながら、正二に同情した。「おれのかわりに小便してこいというのがいないだけ、いいのさ。」と、久保さんは長いかみの毛をかきあげたが、「給仕っ。」とどなっても、久保さんなんかは正二にしんせつなほうだった。「長髪賊」というあだ名を、正二は久保さんにつけた。むかし、中国に、そんな名の馬賊だか兵隊だかがいたからだ。

「しちめんちょう」とか、「かまきり」とか、「かぼちゃ」とか、いろんなあだ名を正二は役人たちにつけたが、おとなしい正二がそんな名をおとなたちにつけるようになったのは、移転課というへやの島田新吉という、ちゃめの給仕と知りあってからだ。島田は、なりが小さくて青い顔をしていた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が、みそっ歯だらけの口をあけて、よくけらけらとわらう子だ。年は正二とおなじ十五。小使い室へ茶わんをあらいにいって、よくその子と会った。ひょうきんな子で、頭のはげた小使いさんたちのあだ名をよんでは、小使いさんにはたきをもって追いかけられていた。

「いそがしくて、やんなっちゃう、ぼくのまえにいた会社は、昼休みも一時間あったし、いちんちじゅう本読んでいてもへいきだったんだ。」

茶わんの山をあらいながら、正二がいうと、島田くんもならんであらいながら、

「へん、じゃ、ずうっとそこにいればよかったのに。」

「だって、ここのほうが月給がいいから、夜学へもいけるし、服なんかもくれるっていうからきたんだよ。きみはどこの学校。」

「学校？　学校なんておれいくもんか。」

「じゃ、大きくなってどうするの。」

「しるかってんだ。そんなこと。」

と、わらう島田くんの前歯は、ほんとうに、みそっ歯ばかりだ。おかし屋の末っ子の島田くん、おかしをたべすぎてあんな歯になったのかなと、正二は思った。だれでもかまわずあだ名をつけて、ろう

かをあるくときはいつも、紺サージの制服のズボンのポケットに両手をつっこんで口ぶえをふいているのんきそうな島田くんを、正二はすきになった。昼休みの三十分には、へやにいると用をいいつけられるので、正二はよく島田くんといっしょに、となりの小学校の校庭へあそびにいった。唱歌室からきこえてくる、「菜の花ばたけに入り日うすれ……」のピアノの音に、正二は小学生のころをなつかしく思いだした。（いいなあ。）みんなから先生先生とうやまわれる、小学校の先生になりたいなあ、と、ぼんやり考えた。いまのじぶんの「給仕」といういちばん下の役めが、とてもみじめに思えた。弟や妹のような子たちがたのしそうにあそんでいる学校の庭は天国だったが、天国には三十分たらずしかいられなくて、すぐ、「給仕。」とどなられ追いまわされる、地獄へもどらなくてはならなかった。——そんなことを島田くんは考えないらしく、校舎のかべにもたれた正二をほったらかして、上級生の子たちのボールあそびの中へわってはいって、きゃっきゃっとボールをなげたりした。

半年あまりして、正二がやっと仕事になれて、小使い室へいってはうまく時間をぬすんでサボることもおぼえたころ、整地課に、正二のつくえとむかいあってもうひとつ小さいつくえがおかれ、岩井勝蔵という十六になるいなかから出てきた少年が新しく給仕にはいった。それで正二は、役所でも夜学の予習や復習がいくらかできるようになった。岩井くんは色が黒く、目が細く、ずんぐりしたせた

けで、猪首だった。無口で動作はのそのそしていた。岩井くんがはじめてきた日、正二はつくえをむかいあわせてこんな話をかわした。

「きみ、どこからきたの。」

「おれ、福島県だ。」

「福島県のどこの町なの。」

「山ん中だよ。」

「どうしてここへきたの。」

「……。」

答えにくい顔をした。

「学校へいってるの？」

「うん。」

「どこの学校？」

「電機学校さいってんだ。」

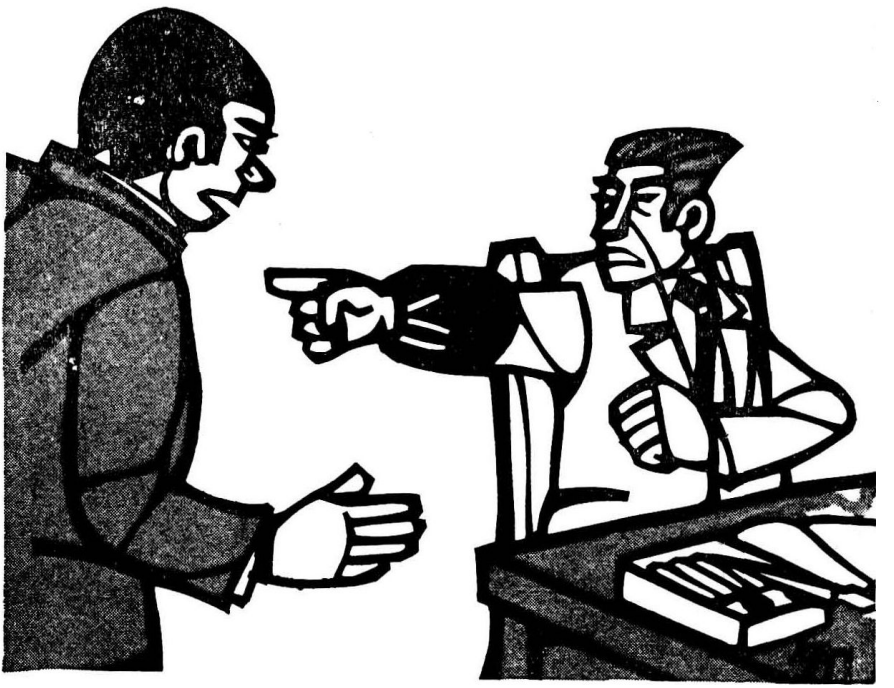
「学校、すきなの？」

「まだわかんねえ。」

岩井くんのほうは正二になにもきかなかった。動作ののそのそした岩井くんは「しちめんちょう」とあだ名のついた大池（おおいけ）というごま塩頭の技官から、「よんだら早くくるんだ。」と、さっそくどなられた。「へい。」といって、大池さんの前でつっ立っていると、

「なにがへいだ。お茶をくれ、早く早く！」

と、またどなられた。それでも岩井くんは、「はい。」といいなおしただけで、「うし」みたいにのそのそとしてお茶をくんだ。せんぱいになった正二は、のろまの岩井くんがおこられるのを、いじわるく待っていて、給仕の仕事のつらさを岩井くんにもよくあじわわせ



てやりたいような気もちがすこしあったが、すぐに気のどくになってしまって、おこりっぽい大池さんや、せっかちな課長の「かまきり」がベルを鳴らしてよんだときは、じぶんがなるべくとんでいくようにした。

岩井くんは、はじめて謄写版をすらされて、びっくりした。つるつるした油紙の原紙に、鉄筆でざんだ字が、黒い謄写インキをつけたローラーで上からこすると、いくらでも下にしいた白い紙の上にうつるのが、ほんとうに魔法みたいにふしぎに思えたのだ。

「おもしれえな、これは。」

と、インキで黒くなった手で、じぶんの鼻の頭をこすりながら、岩井くんはいった。それで、ひととおり、すりかたを教えると、正二はその後、岩井くんを謄写版がかりにしてしまった。そういえば正二も、はじめて謄写版の機械にむかったころは、やっぱり岩井くんのようにおもしろかったのだ。はじめ岩井くんはインキをだぶだぶにつけて、字も読めないほどまっ黒にすりあげて、役人にしかられたが、へこたれないでだまってすりつづけた。それを見ているうちに、正二の頭の中に、雑誌をつくる考えがひらめいた。

正二のいっている夜間中学の二年生のクラスでは、詩や歌や作文のすきな少年たちがあつまって、

『ほたるの光』という回覧雑誌を出していた。原稿用紙をとじこんだのに、ボール紙をつけてまわし読みするのだが、このごろそのなかまにくわわった正二は、「そうだ、あれとおんなじものを謄写版ですって雑誌にしたら……。」と思いついたのだ。でも、小学校のとき作文はいつも丙だったという島田や、腕力は強そうだが、うしみたいにのっそりとしていて、文章なんかにちっとも趣味のなさそうな顔をしている岩井くんが、そんな雑誌をつくることにさんせいするだろうか。つくってみても、ろくなものはできないのじゃないかと、じぶんだけは子どもの雑誌になんども童話や作文が入選したうぬぼれもあって、正二は考えた。ところが思いがけなくいいなかまを見つけた。

二

移転課の島田くんのへやにも、新しい給仕がひとりはいってきた。小つぶで色の浅黒い、赤えんどうのようにまるまっちい少年だったが、

「こんど、おれのへやにきた赤えんどうは、へんなやつだよ。いなかからきたんだけど童謡みたいなのを書いてんだぜ。」

小使い室で島田くんは、さっそくその子のあだ名をいいながら正二に話した。その子の名が佐藤茂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com